

大和小学校

研究主題 「学び合い高め合い意欲的に学ぶ児童の育成」

副題 一個が生かされ 基礎学力の定着をめざした授業づくりー

I 研究の内容

1 研究の具体的内容と方法

(1) 児童の実態把握

ア学力調査 国語と算数の前年度の学習の定着を客観的テストで調査する。

イ児童アンケートにより児童の生活および学習習慣の実態を把握する。

(2) 理論研究・学習会

ア講師を招聘しての学習会の実施

イ各種研修会への参加と環流報告

(3) 個に応じた算数科の指導の工夫

ア児童の実態に即した指導の工夫を行う。

イ発達段階に応じた自己評価の工夫

ウ授業研究と一人一実践の授業公開を行う。

(4) 学習環境を整える手立て工夫

ア発達段階に応じた学習規律の定着をめざして、昨年度の作成した「大和小の学習のやくそく」の改善

イ学習の振り返りができるような教室掲示の工夫

(5) その他

ア英語活動の研修

II 研究実践

1 理論研究

(1) 学習会

ア 「算数科の指導の工夫」

講師：峡東教育事務所 指導主事 小林 俊彦先生

イ 英語活動研修

講師：ALT ジェイソン・ミラー

2 研究授業

(1) 第4学年 算数科「わり算の筆算を考えよう」 授業者 滝島正彦教諭

講師：義務教育課 指導主事 齊藤 功先生

商が「3」になるわり算の決まりを、図を使って考えさせる授業を行った。

算数的活動を重視し、子ども達にじっくり考えさせることができた授業だった。

移行期の4年生の授業内容は大幅に増加していて、授業時間を確保することが難しいので、授業の内容によっては軽重をつけて扱うことが大切である。この時間

の内容を学習するのにふさわしい活動だったかは、課題が残った。

(2) 第2学年 算数科「九九をつろうかけざん(2)」 授業者 小石澤淳子教諭

箱に入ったチョコレートの数を、かけ算九九を使って工夫して求める授業を行った。チョコレートをアレー図に置き換えて、「一当たり量」を丸で囲む操作活動を行わせることで、子どもがの多用な考えを引き出すことができた。「一当たり量×いくつつ」というかけ算の概念の定着を図ることもつながった。

3 授業実践（一人一実践）

- | | | | |
|---------|--------------------|--------|----|
| ・第 1 学年 | 算数科「どちらがひろい」 | 岩下 亜希子 | 教諭 |
| ・第 3 学年 | 算数科「箱を作ろう」 | 渡邊 満智子 | 教諭 |
| ・第 5 学年 | 算数科「面積の求め方を考えよう」 | 萩原 昇 | 教諭 |
| ・第 6 学年 | 算数科「比」 | 清水 誠治 | 教諭 |
| ・さくら学級 | 算数科「表とグラフ」 | 阪本 辰彦 | 教諭 |
| ・りんどう学級 | 算数科「かけ算のしかたを考えよう」 | 武井 敏江 | 教諭 |
| ・第 6 学年 | 音楽科「心をこめて演奏しよう」 | 名取 美和 | 教諭 |
| ・第 2 学年 | 学活「かんしゃして食べようー食育ー」 | 細田 香織 | 教諭 |

III 成果と課題

1 成果

- (1) 学習および生活実態におけるアンケート調査や CRT 検査を一学期に実施した。少人数の学級であるため、学校全体としての大きな傾向よりも、担任が個々の実態を把握するのに役立った。
- (2) CRT やレディネステストをもとに算数科において「わかる授業」づくり、「個に応じた指導の工夫」について取り組むことができた。特に、2回の研究授業では、低・高学年の発達段階に応じた指導の工夫を検証し、基礎基本を定着させるための手だてや算数的活動および言語活動を取り入れた授業のあり方を学び合うことができた。
- (3) 一人一実践の授業を通して、先生方の指導法を交流し合うことができた。
- (4) 英語活動の研修で全校の先生が、英語活動の方法を学ぶことができた。

2 課題

- (1) 家庭学習の定着や生活上の課題は、保護者との連携協力が不可欠となることから、アンケート結果を保護者に知らせ、規則正しい生活習慣や家庭学習の大切さを啓蒙していく方法について課題となっている。
- (2) 望ましい学習習慣や学習態度の定着についての取り組みは、「大和小の学習のきまり」として全校で確認し、発達段階に応じた取り組みを行い、少しずつ成果も現れてきているが、まだまだ充分とは言えない。
- (3) 「わかる授業」と望ましい「学習集団づくり」は車の両輪のようなものである。わかる授業を推進し個に応じたきめ細かい指導を工夫することで、基礎学力の定着とともに、個が生かされる学習集団・学級づくりをめざしていくことは、本校の実態にかなった大切な課題なので、今後も研究のテーマとして継続して取り組んでいく必要がある。

(研究主任 渡邊満智子)